

ゼバステイアン・ブラント 『阿呆船』
„Vberhebung der hochfart“
〔「傲慢の思い上がり」〕に関する語学的考察 (2)

大 島 浩 英

要 旨

1494年にアルザスの人文主義者・詩人のゼバステイアン・ブラントによって風刺詩集 *Das Narrenschiff* (『阿呆船』) がバーゼルで発行された。ドイツ語の時代区分では1350年～1650年頃の初期新高(地)ドイツ語に分類される言語で書かれた韻文の詩(クニッテル詩句)である。言語的にはまだ不統一な言語状況の中で書かれ、ブラントによってある程度は標準化されたこの詩集のうち、前回の考察に続いて「傲慢」を扱った詩 [92] „Vberhebung der hochfart“ の39～80行目(全124行)までを取り上げ、語学的な分析を行った。キリスト教(カトリック)的倫理観に基づいた風刺詩集のため、道徳的罪への戒めが基本的テーマとなっている。

今回の考察でも中世高地ドイツ語から新高ドイツ語へ向かう途中の中間段階の状況が音韻、語彙、統語の側面でそれぞれ確認できたが、今回読んだ詩行では、不安定ながらも副文内で定動詞の後置が行われ、それによって枠構造が形成されている例が比較的多く認められた。韻律が優先される韻文詩ではあるが、韻律の条件を整えつつも文法規範をある程度意識しようとする傾向が見られる。

キーワード：初期新高ドイツ語、ゼバステイアン・ブラント、阿呆船、風刺文学、
韻律、ドイツ語学

はじめに

本稿で考察する対象は1494年バーゼルで発行された風刺詩集 *Das Narrenschiff* (『阿呆船』) で、前回行った考察の継続である。ドイツ語の時代区分では1350年

～1650年頃の初期新高（地）ドイツ語に分類される言語で書かれた韻文の詩である。初期新高ドイツ語は1050年～1350年頃の中世高地ドイツ語（中高ドイツ語）と1650年以降の新高ドイツ語との中間段階にある、いわば過渡期の時代に使われていた言語であるため、規範によって統一された言語とは言い難く様々な方言に分かれ、書記法、音韻、語形、語順などにおいて多様な用法が見られる言語状況にあった。このような時代に、アルザスの人文主義者で詩人のゼバスティアン・ブラントによって著されたのが本稿で取り上げる韻文の詩集 *Das Narrenschiff*（『阿呆船』）である。「阿呆船」とは、様々な愚か者たちを満載して「阿呆の国（Narragonia）」を目指す船のことだが、ここでいう愚か者とは、中世ヨーロッパのキリスト教（カトリック）的倫理観から見た道徳上の罪びとである。したがってこの詩集には、キリスト教世界における7つの大罪（罪源）が基本的テーマとしてその根底に横たわっている。

さて本稿では、「傲慢」を扱った詩 [92] „Vberhebung der hochfart“ の39～80行目（全124行）までを取り上げ、主に語学的な分析を行うことにする。なおこの詩集は、一行に揚格（Hebung）が4つあり規則的に抑格（Senkung）と入れ替わる韻律をもつクニッテル詩句（Knittelvers）で、基本的には二行一組で脚韻を踏む形式（Paarreim）で書かれており、また Jambus（弱強格）のリズムのため各詩行はアクセントのない抑音（Senkung）から始まっている。本文の和訳については韻律に関係なくできるだけ逐語訳を行い、また原文には5行ごとに行数を付した。

使用テキスト

原文：

Sebastian Brant: *Das Narrenschiff*. Studienausgabe. Mit allen 114 Holzschnitten des Drucks Basel 1494. Hrsg. von Joachim Knappe. Stuttgart 2005. (Reclams Universal-Bibliothek Nr. 18333) S. 428 f.

現代語訳：

Sebastian Brant: *Das Narrenschiff*. Übtrg. von H. A. Junghans. Hrsg., Anm. u. Nachw.: Mähl, Hans-Joachim. Stuttgart 1964. Bibliographisch ergänzte Ausgabe 1992. (Universal-Bibliothek Nr. 899) S. 341-343.

上記および次の各テキストに付された注釈を適宜参考にした。

Sebastian Brant: *Das Narrenschiff*. Hg. von Felix Bobertag. Berlin und Stuttgart 1889. (Deutsche National-Litteratur. Hg. von Joseph Kürschner, Bd. 16) S. 250 f.

Zarncke, Friedrich: *Sebastian Brants Narrenschiff*. Leipzig 1854. (Hildesheim 1961) S. 435 f.

略語：

mhd. (=mittelhochdeutsch)：中(世)高(地)ドイツ語、

frnhd. (=frühneuhochdeutsch)：初期新高(地)ドイツ語、

nhd. (=neuhochdeutsch)：新高(地)ドイツ語

本文中の Knappe、Junghans / Mähl、Bobertag、Zarncke に関する注釈、説明などの記述は、すべて上記の文献からの引用である。

I

Wer lert durch hochfart / vnd durch gelt	40	Wer lernt um Hoffart nur und Geld,
Der spiegelt sich alleyn der welt		Der spiegelt sich allein der Welt,

虚栄と金のために学問をする者は
世間にはただ(このように)映っている

39行目では、不定関係代名詞 *wer* に導かれる副文内で定動詞 *lert* は正置されており、副文内での定動詞後置は行われていない。またこの *lert* について、Frnhd. には *lernen*, *lernen* の2つの語形が存在するが、現代語のような *lehren* (「教える」)、*lernen* (「学ぶ、教わる」) という区別はなく、そのいずれもが「教える」、「学ぶ、教わる」の両方の意味を持っており、この行では *lert* が「学ぶ」の意味で用いられている。またここではさらに *studieren* (「学問をする」) の意味も含まれている。

前置詞 *durch* については Knappe には *wegen*、Bobertag では *um~willen* (「~のために」) という原因、理由を表す注釈が加えられており Mhd. の用法に近いが、主に(「手段、方法」)を表す現代語とは意味のずれが認められる。また40行目の *alleyn* では二重母音 *ey* において *i* の代わりに *y* が用いられている。この2行は *gelt*, *welt* で脚韻を踏んでいる。

Glich als eyn nãrrin die sich mutzt		Wie eine Nãrrin, die sich putzt
Vnd spiegeln dũt der welt zũ tutz		Und spiegelt und die Welt verduzt,

おめかしをして
そして世間には不快に映る阿呆女と同じように

ここでは現代語の *gleich* へと二重母音化する前の長母音 *i* をともなった語形 *glich* が現れている。*eyn nãrrin* の *eyn* でも *y* が二重母音において *i* の代わりに用いられ、女性を表す変化語尾 *e* が脱落している。これに続いて *nãrrin* を受ける関係代名詞 *die*

に導かれる副文においては定動詞 *mutzt* が後置されており、粹構造が成立している。また *mutzt* は Nhd. の *sich putzen* (「化粧する」)、*sich aufputzen* (「身を飾る、めかしこむ」) に対応するがここでは Mhd. の語形 *mutzen* (nhd. *putzen, schmücken*) で現れており、*m* → *p* への子音変化が見られる。

42行目の *spieglen dūt* (> nhd. *spiegeln tut*) の *dūt* は押韻のため用いられた表現と思われる。また *zū tutz* に関しては、*Knape* に *zum Verdutzen; zum* (*durchaus unangenehmen*) *Erstaunen* (「啞然、まったく不愉快な驚き」)、*Junghans / Mähl* では *zum Anstoß, um Verwunderung oder Verwirrung zu stiften* (「不審と当惑を引き起こす動機」)、また *Bobertag* では Grimm の辞書記述²⁾を引用して „*zu dutz*“ = *Stoß, Anstoß* (「衝撃、怒り」) という説明がそれぞれなされており、総合すると「(世間に) 嫌悪感を与えるような」といった意味が表現されているように思われる。ここでは *mutzt, tutz* で脚韻を踏んでいる。

<p>So sie vff spannt des tūfels garn Vnd macht vil selen zūr hellen farn 彼女 (阿呆女) は悪魔の糸³⁾を張りめぐらし 多くの魂を地獄へと導くならば (ので)</p>	<p>Wenn sie spannt auf des Teufels Garn Und läßt viel Seelen zur Hölle fahrn.</p>
---	---

行頭の *so* は Mhd. の「条件」を表す *wenn*、あるいは Frnhhd. で「理由」を表す *weil* の意味で用いられた従属接続詞で、副文を形成している。この副文内の定動詞は *vff spannt* で現代語の分離動詞 *aufspannen* に対応しているが、副文内で後置されていない。これに対して現代語訳では *spannt auf* となっており、*aufspannt* として定形後置する副文内の語順配置にはなっていない。また *des tūfels garn* は 2 格付加語 *des tūfels* が前置されたザクセン 2 格である。44行目の *macht* は現代語の使役を表す助動詞 *lassen* と同様に用いられているため、前行の *so* に導かれる副文内ではあるが *macht* に対応する本動詞 *farn* (> nhd. *fahren*) が文末に配置され、定動詞 *macht* は後置されていない。ここでは *garn, farn* で脚韻を踏む。

<p>Das ist das kützlin / vnd der klob 45 Do durch der tūfel sūcht groß lob それは (おとりの) フクロウと (鳥を捕獲する罌の) 棒 それにより悪魔は称賛を得ようとする</p>	<p>Das ist das Käuzlein und der Klobe, Wodurch der Teufel sucht nach Lobe,</p>
--	--

「フクロウ、変り者」を意味する *der Kauz* の縮小名詞 *das Käuzlein* が原文では

das kützlin という語形で用いられ、ü → äu, -lin → -lein のように二重母音化する前の状態が見られる。Knape, Junghans / Mählによるとフクロウは Lockvogel 「おとりの鳥 (誘惑者)」として使われていたという⁴⁾。また klobe は現代語の der Kloben (「丸木、丸太」)に対応し、原文では „gespaltener Stock (zum Vogelfangen)“ (「(鳥捕獲用の) 割り木 (=先割れ棒)」) という注釈が付されている。なお Zarncke は、女性をおとりの鳥とみなすたとえはすでに古くから存在すると説明している⁵⁾。

Do durch は現代語の dadurch に対応するものと思われ、do から da への母音変化、do durch が dadurch へと一語化される傾向が見られる。また定動詞 sucht には mhd. suochen での二重母音 uo がまだ残っているが、これが Nhd. に近づくにつれ単母音化され、長音の u をともなった suchen へと変化していく。これとは逆に tüfel (< mhd. tiuvel) では nhd. Teufel のように ü → eu へと二重母音化される以前の長母音の語形が用いられている。また groß lob の形容詞 groß は無語尾のままである。この行では klob, lob で脚韻を踏んでいる。

Vnd hat gefüret manchen hyn	Und hat geführet manchen hin,
Der sich bedunckt vor witzig syn /	Der klug sich hielt in seinem Sinn.
そして (悪魔は) 多くの者を (向こうの世界へ) 連れ去った	
自分を利口と思っている (ような者を)	

47行目の hat gefüret では現在完了の助動詞 hat に対応する過去分詞 gefüret が文末に置かれず助動詞の直後に配置されており、梓構造が未整備である。次行の der は前行の manchen を受ける関係代名詞と考えられこれを主語として sich bedunckt が続き、「自分を～と思い込む (うぬ惚れる)」という意味内容を表しているが、現代語では前綴り be- のない dünken が „sich~[zu sein] dünken“ という形でこの意味を表現している。また vor は後続の witzig (<mhd. witzec, witzic: klug, weise. 「賢い、利口な」) とつながり nhd. vorwitzig (「好奇心の強い」) という一語の概念を表しているように思われる。ここでは hyn, syn で脚韻を踏む。

II

Balaam gab Balach eynen rott	Einst Bileam Balach Rat ersann,
Das Jsrahel erzürnet gott	Daß Israel Gottes Zorn gewann
バラムはバラク王に忠告し	
イスラエルは神の怒りを買った ⁶⁾	

49行目の *eynen* (>nhd. *einen*) では二重母音において *i* に代わって用いられた *y* が見られる。また *rott* (「助言、忠告」) に対応する語は mhd. *rat*, nhd. *Rat* でそれぞれ同じ母音であるが、Frnhd. では *raut*, *roth*, *rat* のように母音に多様性が認められ、*o* の母音を使うことで *rott* と50行目の *gott* とで脚韻を踏ませている。また50行目冒頭の *das* には内容文を導く形式的な機能だけではなく「結果」(nhd. *so dass*) という意味的な機能も含まれていると思われるため、前行の帰結として50行目は読める。なおこの行の *erzürnet* は過去形で語尾の *e* が脱落したものと考えられるが、ここでは英語の過去形語尾 *-ed* と類似した形式となっている。

Vnd nit möcht jn dem stritt beston	Und nicht solt in dem Kampf bestehn,
Das es durch frowen zû müst gon /	Zu dem um <i>Frauen</i> es mußß gehn.
そしてその戦いに勝利できなかった	
女たちによって起こされねばならなかった (戦いに ⁷⁾)	

51行目の *möcht* (<mhd. *möhte*) は mhd. *mugen* の接続法過去で「可能」を表す助動詞として行末の *beston* (<mhd. *bestan*, *besten* 「勝つ (besiegen)」) と呼応し、ここでは枠構造が成立している。また *stritt* (<mhd. *strit* 「戦い」) には nhd. *Sreit* のように二重母音化される前の長母音が見られる。そして次行の *das* はこの *streit* にかかる内容説明の副文を導く従属接続詞 (frnhd. *dass*) と考えられる。ここでの *müst* (=mhd. *müeste*) は mhd. *müezen* の接続法過去で助動詞として機能しており、この語を挟んで *zûo~gon* という本動詞が配置されている。この本動詞は Nhd. の非人称で用いられた分離動詞 *zugehen* (「進行する、生ずる、起こる」) に対応するもので、散文なら „Das es durch frowen zû gon müst“ といった語順になるとと思われるが、副文内での分離動詞と助動詞の位置関係が不安定となり、そこに韻律の影響もうかがえる。*beston*, *gon* で脚韻を踏んでいる。

Hett Judith sich nit vff gezyert	Hätt Judith sich nicht schön geziert,
Holofernes wer nit verfür̃t /	Wär Holofernes nicht verführt;
ユディットが美しく着飾らなければ	
ホロフェルネスも誘惑されなかっただろうに ⁸⁾	

この行は接続法過去の完了助動詞 *hett* (>nhd. *hätte*) が文頭に置かれているため *wenn* が省略された条件文と考えられ、これに対応する本動詞の過去分詞形 *gezyert* が文末に配置されて枠が形成されている。また再帰用法で用いられた *gezyert*

(>nhd. zieren 「飾る」) に対して vff (>nhd. auf) がその前に置かれているが、ここではこの vff が「飾る」意味を強調する前綴りのように機能しているのかもしれない。

54行目は接続法過去の受動の助動詞 wer (>nhd. wäre) と文末の過去分詞 verführt (>nhd. verführt 「誘惑された」) とで受動態の枠構造が形成されている。sein + 過去分詞は現代語では状態受動を表す形式であるが、初期新高ドイツ語ではこの形式で動作受動をも表現することがあったと言われているため⁹⁾、ここでは動作受動を表す助動詞 werden の過去分詞 worden を文末に補ってこの行を解釈することが可能であろう。その場合 wer は完了助動詞の接続法過去となる。なお前行が条件を表す副文であるため、現代語ではこの副文に続く主文の文頭に定動詞が置かれるはずだが、ここではその規則は適用されず、定動詞 wer は主語の後に置かれている。ここでは gezyert, verführt で不完全な脚韻を踏んでいる。

Jesabel streich sich varben voll	55	Jesabel strich sich Farben voll,
Do sie meynt jhehu gfallen wol		Als sie wollt Jehu gefallen wohl.
イザベルは色とりどりに厚化粧		
エヒウによく気に入られようとしたときに ¹⁰⁾		

55行目の streich は mhd. strichen の3人称単数直説法過去形で nhd. strich に対応するが、この不定形は nhd. streichen となり母音の変化が異なるためこの行ではまだ Mhd. の語形が使われている。この mhd. strichen がここでは再帰代名詞をとまなつて使われており、「(色とりどりに) 塗って化粧する (sich putzen)」といった意味で用いられている。

56行目文頭の do は過去の時点を表す frnhd. da と同様に用いられ、ここでは Nhd. の従属接続詞 als (「～した時」) に置き換えて考えることができる。そのためこの行は do に導かれる副文ということになるが、定動詞 meynt (「意図する」) は後置されていない。この meynt (>nhd. meint) では二重母音に y が表記されており、„jhehu gfallen wol 「エヒウによく気に入られること」“ という内容を目的語にとっている。また gfallen では韻律を整えるため、ge- の e 音が語中音消失している。ここでは voll, wol で脚韻を踏む。

Der wis man spricht / ker dich	Der Weise spricht: „Kehr dich geschwind!
geschwynd	
Von frowen / sie reyzt dich zür sünd	Der Frauen Blick reizt dich zur Sünd!“
即座に (目を) そむけよ、と賢者は言う	

女性から、彼女はお前を罪へと誘惑する

der wis man は Nhd. では der weise Mann となり、形容詞 frnhd. wis の母音が ei へと二重母音化する前の mhd. wis の語形と、さらに形容詞の格変化語尾 e が脱落し無語尾で用いられている状態が見られる。また ker dich については、Nhd. の sich kehren (「転じる」) に対応する再帰用法、du に対する命令法ともに現代語と同様の使い方がなされている。文末の副詞 geschwynd は Nhd. の geschwind に対応するが、Mhd. では geswinde, beswinde, swinde, swint など多様な語形が存在し、前綴りについては be- と ge- がいずれも強意的な意味で付加されており、これらの前綴りに機能的な共通性が見出せるように思われる。

次行の von frowen については 1 格 (mhd. vrouwe, vrowe) 以外はすべて弱変化語尾が付き frowen (mhd. vrouwen) となり無冠詞であるため、この文では女性単数 3 格か複数 3 格かを特定することが困難である。mhd. reizen (「誘う」) に対応する reytzt についてはここでも二重母音の一部として y が使われており、さらにその後 Mhd., Nhd. には見られない t が Frnhd. においてのみ記述されている。sünd の語末音 e の脱落により sünd, geschwynd でかろうじて脚韻を踏んでいる。

III

Dann n̄arrin vil sint also geil		Denn Närrinnen sind oft so geil,
Das sie jr gsiecht bald biettent feil	60	Daß sie ihr Antlitz bieten feil

というのは多くの阿呆女は大そう貪欲なので
(彼女たちは) 自らの顔 (まなざし) をためらいもなく売りに出す

dann はここでは denn と同様に理由を表す接続詞として用いられており、Frnhd. では両者に共通性が見られる。これに続く主語の n̄arrin (「阿呆女」) は定動詞 sint との関係から複数であるが、複数を示す語尾 -nen が記述されていない。また sint (>nhd. sind) では、無声化された語末音を示すため d に代わって t が用いられている。also geil の also はここでは nhd. ganz, sehr (「非常に」) という強調の意味で添えられており、これに n̄arrin の性質を表す形容詞 geil が続くが、Frnhd. の geil には Knape による注釈の begierig (「貪欲な」) 以外にも「高慢な」、「恥知らずな」、「みだらな」、「勝手気ままな」、「荒々しい」など様々なニュアンスの意味が含まれる。Bobertag はこの行に対して旧約聖書の「箴言」第 7 章 6 節以降を注釈として加えている。そこではみだらな女が一人の知恵のない若者を一夜の情事へと誘惑する内容が

語られこの箇所はそれを戒めた一節であるため、この場合の geil は nārrin の「情欲、色情」という性質を表現していると解するのが妥当と思われる。

60行目の das (>nhd. dass) は前行の also と呼応して「大変～なので」という度合いの内容を示している。この das 文中の gsiecht は Nhd. の Gesicht に対応して主に「顔」を意味し、現代語訳でも Antlitz (「かんばせ」という語を当てており、さらに尾崎盛景訳でも「顔」と訳されているが、mhd. gesiht では「見ること」、「視覚」を意味しており、ここでの gsiecht は Knape による注釈の Blick, Anblick「まなざし、目つき」のように、誘惑の意図を含んだ意味と考えていい。なお gsiecht という語形に関しては ge の e 音が韻律のため脱落し、i が ie と長母音化している。続く biettent feil は Nhd. の分離動詞 feilbieten (「売りに出す」と同じ意味であるが、biettent では3人称複数現在形の人称変化語尾に t が付加されており、ここにはまだ Mhd. の形式が残っている。なおこの biettent は定動詞だが、das (>nhd. dass) に導かれる副文内で後置されていない。ここでは geil, feil で脚韻を踏む。

Vnd meynen / es sol schaden nüt	Und meinen, es soll schaden nicht,
Ob sie eyn blick dem narren gytt	Schaun sie dem Narrn ins Angesicht.
それは害にならない、と(阿呆女たちは)思っている	
たとえ彼女らが阿呆に流し目送っても	

61行目の定動詞 meynen では nārrin (>nhd. Nārrinnen) を主語とする3人称複数現在形でも前行とは異なり人称変化語尾に t は見られず、人称変化形に揺れが認められる。また否定の nüt は nit という形でも現れ、両者が併存している。

次行文頭の ob は通常 gleich, wol, auch などの語をともなって「たとえ～でも」という認容の意味を表すが、ここでは ob だけで認容が表現されている。また eyn Blick の eyn では二重母音の一部が y で表記され、さらに男性4格を示す語尾 -en が脱落している。

文末の gytt は Mhd. では git に対応しており、mhd. geben の3人称単数現在形 mhd. (er) gibet が git へと変化した縮約形 (Kontraktion) がここでは用いられている。またこの文の主語 sie は3人称複数の nārrin (>nhd. Nārrinnen) を受けているが、ここでは単数扱いとなっており、これにより gytt と nüt で脚韻を踏ませることができる。このようにして韻律が整えられたことで、ob に導かれる副文内での定動詞後置が成立したとも考えられる。

Worlich gesicht / bringt böß gedanck Doch bringt ein Blick schon auf schlechte
Gedank',

Vnd setzt eynen vff den narrenbanck Setzt manchen rasch auf die Narrenbank,
色目は確かに良からぬ考えを抱かせ
人を阿呆ベンチにすわらせる

worlich は nhd. wahrlich に対応し、Frnhd. にも warlich, werlich といった語形が存在するが、ここでは母音が o へと円唇化した形で現れている。またこの行でも gesicht という語が使われているが、ここでは語中音 e の脱落はなく、意味的には「顔」ではなく Zarncke の注釈 (nhd. das ansehen, der anblick) にも見られるように 60 行目の gsiecht と同様「まなざし、目つき」といった意味で用いられている。この worlich に続いて定動詞 bringt が第 2 位に置かれるはずだが、ここではこの規則が守られず韻律の調整が優先されたものと思われる。64 行目の「人」を表す不定代名詞 eynen では y が i の代用として使用されており、また韻律を整えるため ey と nen はこの場合どちらも Senkung で読まれているものと思われる。vff den narrenbanck の前置詞 vff (>nhd. auf) は二重母音化前の長母音で現れており、これに続く 4 格の den narrenbanck は男性名詞で用いられている。現代語の Bank (「ベンチ、長椅子」) は女性名詞となっているが Mhd. では女性名詞に加えて男性名詞としても存在しており、Frnhd. のこの文では Mhd. の名残が見て取れる。この行では gedanck, narrenbanck で脚韻を踏んでいる。

Der dar noch lychtlich nit abstat 65 Der nicht eher wieder heimgegangen,
Biß er den hâher gfangen hatt / Als bis er den Häher hat eingefangen.
当人はなおそこで簡単 (すぐ) には立ち上がらない
カケスを捕らえるまでは

65 行目の der は前行の eynen (「人を」) を受ける関係代名詞で、dar noch は場所を表す dar (「そこに」) と時間的意味の noch (「なお、さらに」) とで「なおそこに」と読めるが、noch を母音変化した nhd. nach に対応するものとして dar noch を nhd. danach (「そのあと」) と解することもできるのではないだろうか。文末の abstat については Knape が aufsteht (「立ち上がる」) という注釈を付けているが、本来は ab (「離れて」) の意味から、「ベンチから降りて、離れて」という表現がとられている。ここでは関係文の副文内で定動詞としての分離動詞 abstat が一語で書かれ定形後置されており、現代語の語順に近づいていると言える。

しているが、これと関連する本動詞の不定形 *schowen* が Nhd. のように文末には置かれず、*wolt* の後に続いて配置されているため梓構造は成立していない。また *frömde man* において、*frömde* は強変化の複数 4 格形で格変化語尾は *nhd.* と同様に *e* が付加されているが、母音については *mhd. vremde* → *frnhd. frömde* となり円唇化が起こっている。これに続く *man* は複数 4 格で用いられ、Nhd. では *Mann* → *Männer* と複数形での語形変化が大きいが、ここでは Mhd. と同様に無変化で用いられている。さてこの行では *Dyna* が「男たち (*mhd. man*)」を見ようとしたことになっているが、この出典となる旧約聖書「創世記」34章 1～2 節では、*Dyna* がその地（カナンのあるシケムの町）の女たち（*die Töchter des Landes*）に会おうと出かけて行ったとあり、*Dyna* を引き入れ辱めたのはハモルの子シケムであった。したがって 69 行目の *man* は「男たち」ではなく「人々」の意味で用いられているのかもしれない。

70 行目の *biß* は従属接続詞として機能しており、ここでは「～の時に」という同時性を表すと考えられる。この *biß* による副文内で定動詞 *kam* が文末に配置されており、定形後置が成立している。ここでは *man, kam* で脚韻を踏む。

<i>Eyn demütig frow ist eren wert</i>	<i>Eine demütige Frau ist ehrenwert</i>
<i>Vnd würdig / das sie werd geerd</i>	<i>Und würdig, daß sie werde geehrt,</i>
謙虚な女は名誉を受けるに値する	
そして尊敬されるにふさわしい	

eyn demütig frow では *eyn, demütig* のいずれにも女性単数 1 格を示す語尾 *e* が脱落しており、また *eyn* の二重母音で *i* の代わりに *y* が用いられている。次行の *das* (>*nhd. dass*) は従属節を作り、ここで *würdig* に対する内容が述べられているため、この従属節内は間接話法を表す接続法現在で記述されている。„*das sie werd geerd*“ の *das* 文内は動作受動の表現がとられており、そのためここでは受動の助動詞 *werden* が 3 人称単数の接続法現在の形式 *werd* で用いられ、これに本動詞の過去分詞形 *geerd*（不定形：*frnhd. eren*「尊敬する」）が対応している。この過去分詞形 *geerd* の語尾は *t* ではなく *d* で表記されており、また副文内ではあるが定動詞 *werd* が文末に置かれず、定形後置は成立していない。*wert, geerd* で脚韻を踏んでいる。

<i>Aber welch hochfart nymbt für hend</i>	<i>Die aber Hoffart nimmt zu Händen,</i>
<i>Deren hochfart ist ouch gantz on end</i>	<i>Deren Hoffart wird auch nimmer enden,</i>
しかし女が慢心を手にすれば、	
そのうぬ惚れにはまさにまったく果てしがたい	

行頭の aber に続く welch はここでは不定関係代名詞 (「～する人」) として用いられ、これを次行では女性単数 2 格の指示代名詞 deren が受けているため、この welch には「女性」という意味が含意されているものと思われる。また Grimm では、「(不定) 関係代名詞 welch によって導かれる副文は後続の主文に対して条件的関係にある」、と説明されていることから、この文は「ある女が～すれば¹²⁾」という条件的な意味をもつ副文であると考えられる。さてこの関係文内の定動詞は 3 人称単数現在形 (直説法) の nymbt (>nhd. nimmt) であるが、副文内での定形後置は行われていない。また für hend については für が nhd. vor に対応するため、ここでは nhd. vorhanden (<vor den Händen 「手もとにある」) という意味との関係から文意を考えることができる。

次行の deren は前述のとおり不定関係代名詞 welch を受ける女性単数 2 格の指示代名詞で hochfart にかかる。この行では ouch (>nhd. auch) に au への母音変化以前の状態が見られ、また on end にはいずれも語末の e 音が脱落することで韻律が調整されている。ここでは hend, end で脚韻を踏んでいる。

Die will ouch allzyt vornen dran Das nyeman mit jr gstellen kan / そんな女はまたいつも前へ出しゃばろうとするので 誰も仲良くやっっては行けぬ	75	Die will auch allzeit vornan dran, Daß niemand mit ihr leben kann.
--	----	---

文頭の指示代名詞 die は女性を受けており、この文では場所を示す語 vornen dran をともなって will (<mhd. wellen) が独立動詞として使われている。また allzyt は Nhd. の allezeit に対応し二重母音化前の状態が保たれているが、ここでは mhd. i (長母音) が i ではなく y で表記されている。

次行の das (>nhd. dass) は形式的な機能に加えて、so dass のような「結果」を表す意味も含まれた従属接続詞として従属節を形成しているように思われる。その中の nyeman には語尾に t(d) の付加がまだ起こっておらず、これに続く mit~gstellen は「～とうまくやっっていく (mit~auskommen)」という意味で g(e)stellen が自動詞として用いられた用法である¹³⁾。そしてこの gstellen を本動詞としてその後には可能を表す助動詞 kan (<mhd. kan [不定形: kunnen]) が続き、これが定動詞となって文末に配置されているため、副文内で現代語と同様の定形後置が成立している。dran, kan で脚韻を踏む。

Die grösßt wißheyt vff aller erdt	Die größte Weisheit ist auf der Welt:
-----------------------------------	---------------------------------------

Jst / können thûn das yeder bgerdt Zu tun verstehen, was jedem gefällt;
この世のどこでも最大の知恵は
皆が欲することを行うすべを知ることだ

Die grōsBt wißheyt では最上級形容詞 grōsBt に格変化語尾 e が脱落しており、また wißheyt (<mhd. wisheit) では nhd. Weisheit へと二重母音化する前の長母音 i が見られる。同様のことが vff (>nhd. auf) にも言えるのは64行目で述べたとおりである。jst (>nhd. ist) については j が i に代わって用いられており、jch (>nhd. ich), jr (>nhd. ihr), jrn (>nhd. ihren), jn (>nhd. ihn), jn (>nhd. in) など、語頭に j が使われることが多い。次に „thûn können“ については現代語訳に „zu tun verstehen“ と訳されているように、ここでの können は nhd. können のような助動詞ではなく、「～するすべを心得ている (nhd. wissen, kennen)」という意味の独立動詞として使われており、そして次に現れる不定関係代名詞 das (nhd. was) に導かれる副文を thûn の目的語にとっている。この2行については、ともに無声化を示す t が語尾に付された erdt, bgerdt で脚韻を踏んでいる。

Vnd wo man das für gûnt nit nymbt Und wenn man das für gut nicht nimmt:
Doch können thûn / das yedem zymbt 80 Zu tun verstehen, was jedem ziemt.
そして人がそれ（その表現）を良く思わないならば
いずれにせよ誰にとってもふさわしいことを行うすべを知ることだ

79行目の wo はこの場合 mhd. wa, wo に見られるように従属接続詞 wenn (「～ならば」) の意味に、また „das für～ nymbt“ は現代語の „etwas für～ nehmen“ (「あるものを～と見なす、考える」) という意味にそれぞれ対応させて考えることができる。そして80行目は78行目と同じ文構造で das が不定関係代名詞として機能し、ここでは「誰にとってもふさわしいこと、礼儀にかなったこと」を行うすべを心得ること、といった意味での解釈が可能であろう。ここでは nymbt, zymbt で脚韻を踏んでいる。

おわりに

本稿で扱った詩行(39行目～80行目)では、これまでの考察でも見られた母音の質的な変化や現代語とは異なる多様な書記法、また接続詞としての das が担う形式的機能以外の意味的機能など、中世高地ドイツ語から現代語へ向かう途中の中間段階の

状況が確認できたが、今回はさらに Mhd. で見られた動詞人称変化における三人称複数現在形での変化語尾 -ent、動作と状態の受動表現における不安定さ、不定関係代名詞としての *welch*、名詞の性の変化などの言語状況についても考察することができた。今回読んだ詩行では、不安定ではあるが副文内で定動詞の後置が行われ、それによって梓構造が形成されている例が比較的多く認められた。クニッテル詩句としての韻律調整が優先される韻文詩において、文法規範への意識がどの程度作用しているのかを今後もさらに分析していきたい。

注：

- 1) 現代語にも方言では *lernen* に *lehren* の意味がある。
- 2) Grimm, J. / Grimm, W.: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854-1971. (Nachdr.—München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1984.) Bd. 2. Sp. 1773.
- 3) Teufelsnetz (「悪魔の網」)
- 4) Eine Eule wurde häufig als Lockvogel benutzt. (Junghans / Mähl)
- 5) „Der hier gebrauchte vergleich, die frau als den auf die leimruthe gesetzten lockvogel anzusehen, ist schon alt.“ (Zarncke)
- 6) 旧約聖書「民数記」22～23章参照。
- 7) 旧約聖書「民数記」31章参照。
- 8) アッシリアに包囲された Bethulia の町に住む寡婦ユディットが、敵の総司令官 Holofernes の首を眠っている間に斬り、その後包囲軍は逃げ去った。
(Meyers großes Taschenlexikon in 25 Bänden. Mannheim 1999. Bd. 11. S. 83.)
- 9) Ebert / Reichmann / Solms / Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993. S. 417 f.
- 10) *jhehu* は固有名詞のため *j* は本来大文字の *J*。旧約聖書「列王紀下」9章30節参照。
- 11) Bersabe とは Batseba のことと思われる。Das Alte Testament. Das 2. Buch Samuel 11, 2-4. (旧約聖書「サムエル記下」11章2～4節)
- 12) „der mit dem allgemeinen relativum eingeleitete nebensatz steht in einem conditionalen verhältnis zum nachfolgenden hauptsatz. *welch* entspricht 'wenn einer!'“ (Grimm, J. / Grimm, W.: a. a. O., Bd. 28. Sp. 1355)
- 13) „II. *intransitiv*. 1) mit einem gestellen, *sich mit ihm gut stellen, vertragen*.“

上記以外の参考文献：

- Baufeld, Christa: Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1996.
Deutsche Bibelgesellschaft: DIE BIBEL oder DIE GANZE HEILIGE SCHRIFT DES ALTEN UND NEUEN TESTAMENTS nach der Übersetzung Martin Luthers. Stuttgart 1978.
Götze, Alfred: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967.
Hennig, Beate: Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch. 6., durchgesehene Aufl. Berlin / Boston 2014.

- Koller, Erwin / Wegstein, Werner / Wolf, Norbert Richard (Hrsg.): Neuhochdeutscher Index zum mittelhochdeutschen Wortschatz. Stuttgart 1990.
- Lemmer, Manfred (Hrsg.): Das Narrenschiff. 3., erw. Aufl. Tübingen 1986.
- Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch. Band I, II, III. Stuttgart 1992.
(Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1872-1878 mit einer Einleitung von Kurt Gärtner)
- Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38. Aufl. Stuttgart 1992.
- Paul/Wiehl/Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik. 23. Aufl. Tübingen 1989.
- Wagenknecht, Christian: Deutsche Metrik. 2. durchg. Aufl. München 1989.
- 伊東泰治、馬場勝弥、小栗友一、松浦順子、有川貫太郎編 『新訂・中高ドイツ語小辞典』
同学社 2001年
- 川口洋 『キリスト教用語独和小辞典』 同学社 1996年
- 工藤康弘 「初期新高ドイツ語における主文の枠構造について —16世紀の資料に基づく分析—」 『ドイツ文学』第92号 1994年、25-34頁
- 工藤康弘、藤代幸一 『初期新高ドイツ語』 大学書林 1992年
- 古賀允洋 『中高ドイツ語』 大学書林 1995年
- 古賀允洋 『中高ドイツ語辞典』 大学書林 2011年
- ゼバステアン・ブランド著 尾崎盛景訳 『阿呆船(上)(下)』 現代思潮社 1968年
- 日本聖書協会 『聖書』(旧約聖書、新約聖書) 1979年
- 山口四郎 『ドイツ韻律論』 三修社 1973年